2022 年 7 月 3 日・佐土原キリスト教会・礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書 8 章 31～9 章 1 節
説教題：十字架を負って

先日、K 兄の納骨式が行われました。葬儀も納骨式も、ご遺族の皆様はもちろんですが、教会で親しい交わりをさせて頂いた私達にとっても辛く、寂しい時です。私は、葬儀の時には涙が出て来て、説教の原稿が見えなくなったり、声が途切れたり、失礼をしてしまうことも多いのです。しかしクリスチャンの葬儀には、悲しみだけでなく、喜びと励ましもあります。喜びというのは、その方の人生をお祝い出来ることです。神様に導かれて生きられたその尊い人生を心からお祝い出来ます。そこで「よくやった。良い忠実なしもべだ」(マタイ 25:21)という主の声を聞く、その時、喜びがやって来ます。そしてそれは、神様にその方を「お委ね致します。祝福して下さい」と祈れることでもあります。励ましというのは、その方の生きられた人生の歩みの中に、豊かな愛を感じる時、神を愛し、家族を、隣人を愛された素晴らしい愛を感じる時、自分のこれからの歩むべき道を示され、人生を励まされる気がするのです。人生の最後に残るのは「神を愛し、家族、隣人を愛する、その愛にどれだけ生きたか」ではないかと思わせられます。聖書に「彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています」(ヘブル 11:4)とありますが、その方の信仰の生涯が私達に豊かに語って下さる、それはクリスチャンの葬儀に参列する大きな恵みだと思います。私達の人生は死で終わらない。私達は、死という門を通って本当の祝福に入って行く、そういう希望に生かされています。だからこそ、この人生を、本当に大事に生きて行きたいと願うのです。

その意味で、イエス様が私達に語りかけて下さるのが、今朝の箇所です。この箇所の前に「ペテロの信仰告白」があります。ペテロはイエス様に「あなたは、キリスト―(ヘブル語の『メシア』、日本語の『救い主』)―です」(8:29)と告白しました。しかしその時、イエスは「そのことをまだ誰にも言うな」と言われます。それは、ペテロを初め弟子達が「ではメシアとは何をする者なのか。イエス様がメシアであるとはどういうことなのか」、それを正しく学ばなければならなかったからです。そこで、それを教えられるのが今日の個所です。しかし「メシアであるとは何を意味するのか」、それはそのまま「メシアの弟子(クリスチャン)であるとは何を意味するのか」、そこに繋がって行きます。「内容」と「適用」と 2 つに分けてお話します。

1：内容…豊かに生きるために自分に死ぬ

まず語られるのが「メシアであるとは何を意味するか」ということです。31 節「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた」(31)。イエスは「神のメシアは、指導者達に殺されることによって救いを成し遂げるのだ」と語られました。それが「旧約聖書―(特に『イザヤ書』53 章等)」が預言する「メシア」の姿でした。「復活」は、この時のペテロには理解出来ないことだったでしょう。だから彼の耳には「私は指導者達に殺される」という言葉だけが飛び込んで来たはずです。だから、それを聞いたペテロは「イエスをわきにお連れして、いさめ始めた」(32)のです。「諌めた」とありますが、ギリシャ語では「叱った」という言葉です。ペテロはイエス様を叱ったのです。「そんなことを言ってもらっては困ります。何ということを言うのですか」と叱った。当時の人々の考えていたメシアとは、「ローマ帝国に支配されているユダヤ人国家をローマから解放してくれ、かつてのダビデ王時代の栄光を取り戻してくれる存在」でした。弟子達も、イエス様の中にそんな姿を夢見てついて来たのです。イエス様が支配者になれば、自分達もそれなりの立場について…と思っていた。だからペテロは、イエスの仰ることを受け入れることが出来なかった。「殺されるようなメシアは、私達の願っているメシアではない」という思いがあったのです。

しかしペテロの「心得違い」に対して、イエスは激しい叱責を為さいます。「下がれ。サタン」(33)。「イエスは…弟子たちを見ながら、ペテロをしかって…」(33)とありますから、ペテロ 1 人の問題

ではない、弟子達皆がそう思っていたのです。しかし、なぜこんな激しい言葉を使われたのか。それは、ペテロの言葉は「イエス様が正に誘惑を感じておられたこと」だったからです。31 節で「人の子は必ず…捨てられ、殺され…なければならない」(31)と言われます。「新共同訳」は「人の子は必ず…排斥されて殺され…ることになっている」(31)と訳しています。「そうなることが既に決まっている」と言われる。誰が決めたのか。神様です。人間としてのイエス様は、その神の決められたことに従おうとされていたのです。なぜでしょうか。

前にもご紹介しましたが、ベサニー・ハミルトンという人は、サーフィンの練習中に左腕をサメに食いちぎられてしまいます。腕から大量の血を流しながら、「神様、助けて下さい」と祈りながら、ボードに乗って水をかいて浜に着くのです。死ぬかもしれないと思う瞬間には「私は神様に守られている」と思うことで、そこを通って行きました。浜に着くと、友達のお父さん、救急隊員が助けてくれました。意識も混濁した彼女を支えたのは、救急隊員の言った「神様は決して君を見放したり、見捨てたりしないよ」という言葉でした。やがて手術が成功し、一命を取り留め、助かったと分かりました。しかし彼女は、プロのサーファーになりたいという夢が砕かれ、心が張り裂けそうにズタズタでした。その彼女を励ましたのは、神の言葉でした。「わたしは、おまえたちのために立てた計画をよく知っている。それは災いではなく祝福を与える計画で、ばら色の将来と希望を約束する」(エレミヤ 29:11)。彼女は「神様は私の人生に計画を持っていて、神様は悪から善を生み出してくださる」と信じて励まされ、やがて片腕でサーフィンに再挑戦し、努力を重ね、コンテストで優勝するまでになるのです。彼女の人生は劇的です。しかし、私達もそれぞれに、助けを求めて祈り、神に希望を見て立ち上がり…そういうところを通って来たのではないでしょうか。CS ルイスは「人間は神を燃料にして走るように造られている」(CS ルイス)と言いました。私達には、何より神と結びつくことが必要なのです。では、罪ある私達を、何が神と結びつけてくれるのか。イエス様の十字架の贖い—(身代わりの死)—だけが、それをして下さるのです。だから、イエス様は十字架への道を歩かれたのです。

しかし人間的に言えば、そういう道を歩むことが嬉しいはずがありません。イエス様の心にサタンが働いていた。「神の使命を果たす者が、本当にそんな苦しみを受けなければならないのか。そうではなく、メシアはもっと華々しい道を歩むはずではないのか。人々の拍手喝采を浴びるようなメシアの道があるのではないのか」。恐らくそういう誘惑を感じておられたのではないでしょうか。ペテロは、その誘惑を励ました、この点において「サタン」になってしまっていたのです。だからこそイエス様は、その誘惑を振り切るように、そして何より「サタンになってしまっている愛弟子」を取り戻すために、激しく叱責されたのです。「下がれ」、この言葉は「後ろに回れ」という言葉です。「私の前に立つな。私の導き手になるな。それは荒野で誘惑して来たサタンの姿だ。私の後ろに回ってもう一度弟子になりなさい。私に従いなさい」、そう言われたのです。

「もう一回後ろに回って、従いなさい」。「従う」とはどういうことか。ここから「イエス様の弟子であるとは、何を意味するのか」という話になって行きます。イエスは言われました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」(34)。「自分を捨て、自分の十字架を負い…」とはどういうことでしょうか。「十字架を負う」とは、本来の意味は「死刑場に向かって歩いて行く」ということです。その意味で「十字架を負い…」というのは「自分を殺す」ということです。では「自分を捨て、自分を殺す」とは、どういうことでしょうか。ペテロが殺さなければならなかったのは、「ペテロの中に住むサタン」です。言葉を換えると「生まれつきのままの自我、自己中心に支配された人間的な思い」です。それが、イエス様をさえ導こうとしたのです。それを殺さなければならなかった。「自分を殺す」というのは、激しい言葉ですが、シスターの渡辺和子さんが「小さな死」ということを言っておられます。「『小さな死』とは、自分のわがままを抑えて、他人の喜びとなる生き方をすること、面倒なことを面倒くさがらずに笑顔で行うこと、仕返しや口答えを我慢することなど、自己中心的な自分との

絶え間ない戦いにおいて実現できるものなのです。『一粒の麦が地に落ちて死ねば多くの実を結ぶ』ように、私たちの『小さな死』はいのちを生むのです」(渡辺和子)。「自分を殺す」とは、生まれつきのままの自我に導かれる生き方、それを殺すことではないでしょうか。そしてそれは「本当にイエス様の後ろに回って、自我に従うのではなく、イエス様の教えに従って歩いて行く」ということではないでしょうか。なぜならイエス様は「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」(ヨハネ 10:10)と言われました。自我ではない、イエス様に従って生きるところに本当に豊かに生きる道があるのです。具体的には、イエスは「神を愛し、隣人を愛して生きなさい」と言われました。星野富弘さんがこんなことを言っています。「色々と経験してきて、自分のためにだけ生きようとした時は、これは本当の意味で自分のいのちを生かしているのではないなと思いました…いちばん喜びを感じるのは、人のために…何かできた時や、自分のやっていることが他の人に喜んでいただけた時なんです。何か人の役に立てた時、いのちがいちばん躍動していると思うと同時に、自分自身の中にも感謝の気持ちが出てきます。いのちというのは、自分だけのものじゃなくて、だれかのために使えてこそ、本当のいのちではないかと思いました」。愛に生きるところに人生の豊かさがあることを語っておられます。

イエス様は、さらに言われます。「人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう」(36)。この「いのち」とは、「私達の魂、心、私達の本当のいのち」、そのように表現しても良いと思います。神が「このいのちを本当に大切にして素晴らしく生きるように」と、そのように造って下さったその「いのち(人生)」です。そしてそれは「永遠のいのち」に続く「いのち」です。イエスは「人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう」(36)と言われました。「そのいのちを失うような生き方をしてはいけない。本当に大切に生きる生き方をしなければならない。永遠のいのちに繋がるような、やがて神と一緒になって喜べるような生き方をしなければならない」と言われたのです。

ジョン・ロスというメノナイトの学者が言いました。「『霊なる存在』であられた神の御子は『肉(人間の形)』を取られた。目に見える具体的な存在となって下さった。それは『信仰は受肉しなければならない。信仰は具体的な形を取らなければならない』ということです」(ジョン・ロス)。「イエス様を信じていればそれで良い」ということではないのだと思います。私達が本当にイエス様を信じているなら、その信仰は「イエス様に従って歩く」という形を取らなければならない。それが結果として「与えられているいのち」を大切に、豊かに行くことになるのです。「そのために、私の後ろに回って、私の背中を見ながら、私の言うこと、することを学んで、私について来なさい」、イエスはそう言われるのです。

2. 適用…主イエスに従って歩く

短く適用を考えます。34 節に「イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい』」(34)とあります。ここで注目しなければならないのは「イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた」という部分です。イエス様は、この言葉を 12 弟子だけに語られたのではないのです。一部の特別な信者にだけ語られているのではないのです。全ての信仰者に—(あなたに、私に)—語っておられるのです。それが一番の適用だと思います。

さらに言えば、イエスは 35 節で「わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです」(35)と言われた。「『十字架を負う』、その 1 つの形は『福音を広めるための奉仕に自分のいのちを用いることだ』」と言われたのです。アメリカの公民権運動のキング牧師に大きな影響を与えたのはインドのガンジーですが、ガンジーはキリスト教に深い造詣を持っていた人です。ある人がガンジーに言いました。「そんなにキリスト教が良いと思うならクリスチャンになってはどうだい」。彼は答えました。「本当にイエスに従っているクリスチャンに出会ったら考えるよ」。私達は、この地に

置かれた教会として「この地の方々に神に出会って頂くため」に伝道して行きたいと願います。それは、神様が私達に期待して下さっている私達の使命です。でも、人々に神に出会って頂くために大切なこと、それも「イエスを信じているクリスチャン１人１人が本当にイエスに従って生きること」ではないでしょうか。聖霊の助けを頂いて、イエス様に従って歩くということを真剣に、具体的に、求めることではないでしょうか。そしてどんな小さなことでも良い、イエスの御言葉に従って生きることではないでしょうか。さらに言えば、あのアーミッシュの人達が、イエス様の御言葉に従って敵を愛したように、私達も願わくは、イエス様に倣って人を愛する労苦のために自ら死ぬことではないでしょうか。大きなことではない。ある神学者が言いました。「家族を助けるために自分を捧げること…それも自分を殺すことなくしては出来ない」。そういうことです。自分を殺すことなくしては、本当の意味で人を愛することは出来ないのでしょう。

このことについて１つの話をして終わります。「左腕を失った柔道家がいました。先生は彼にトーナメントに出場するように勧めました。彼は『そんなのは無理だ』と言いました。しかし先生に強く勧められ、出ることにしました。彼は、来る日も来る日も黙々と１つの技を練習しました。彼は、時に言いました。『先生。こんなことをしていて、私は勝てるのでしょうか』。先生は『私を信じなさい』と言いました。彼は、ハワイで行われたトーナメントで、大方の予想を裏切って勝ち続け、ついに優勝してしまったのです。先生は勝因を分析しました。『勝因は２つある。１つは、１つの技を黙々と練習したこと。それが実を結んだのだ。しかしもう１つは、相手がお前の左手を掴めなかったこと。相手が掴むべき左腕がお前になかったからだ。お前にとって不利だと思われたことが有利に働いたのだ』」。私達にも、それぞれが抱えている状況があります。しばしばそれは変えられない。でも、その中でイエス様の言葉を信じて、黙々とイエス様に従って歩いて行く時、神がその状況さえ益と変えて、そして素晴らしいことを私達の人生にして下さるのではないでしょうか。本当の意味で豊かな人生を送らせて下さるのではないでしょうか。

イエス様は 38 節で「この…時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます」(38)と言われました。イエス様に従って生きる時、空しい思いをすることがあるかも知れません。しかし、やがて主にお会いする時、「よくやった。良い忠実なしもべだ」(マタイ 25:21)とイエス様と一緒に喜べる日が必ず来るのです。その日に向かって、置かれた場所で、主に従って黙々と生きて行きたいと願います。